

遺跡の辺縁部もしくは遺跡の確認されていない段丘上に存在する可能性があるが、今後も急速な類例の増加は期待できないと推測される。このような分布の少なさは植物性食料や海産物、海獣などを主体とし、陸獣によらない食生活を意味するものではない。長万部町静狩貝塚ではクマ・シカ・キツネの骨が出土している（大場・田川1955）。また、八雲町コタン温泉遺跡出土の陸獣で主体となるのはエゾシカで、重要な獲物の一つとして挙げられている（八雲町教委1992）。よって八雲町周辺ではTピットによらない狩猟が主体となっていたと推測される。

（藤原秀樹）

2 Ⅲ群a-3類土器について

ここでは落部1遺跡におけるⅢ群土器、特にⅢ群a-3類土器のあり方を集成しその特徴を簡単にまとめることとしたい。なお、図中で番号のみのものはV章包含層での掲載番号である。

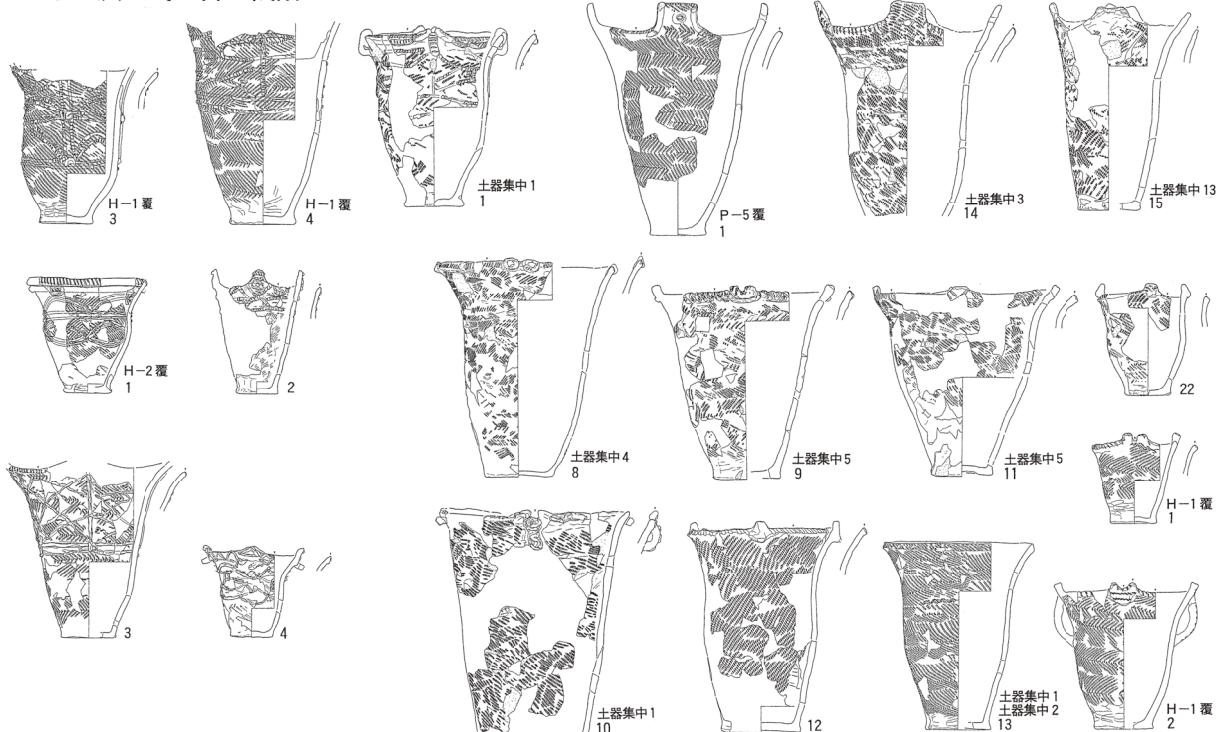
Ⅲ群土器のうち復元されて器形がわかるもの（図上復元を含め）は70個体あまりである。これらは「サイベ沢Ⅶ式」から「見晴町式」、さらには後続する「榎林式、元和D群に関連するもの」である。このうちⅢa-3類；サイベ沢Ⅶ式について器形や文様要素等を概観したところ、これらが円筒上層B式の伝統を受け継ぐ「古い段階のもの」と見晴町式につながる「新しい段階のもの」の二者で構成されることが想定された。集成に際しては、遺跡全体での遺物の分布や15か所から検出された「土器集中」における出土状況にも若干注意を向けている（図V-1～7）。調査区が斜面であることや厳密に層位的に把握されたものではないといった消極的な出土状況ではあるが、2、3のところで伴出関係が認められるからである。

最上段から3段目にかけての資料は「サイベ沢Ⅶ式の古い段階」と考えられるものである。平縁のもの、4か所に突起部や貼り付けがあるもので比較的細い貼付帯により文様が描かれるものがある。口縁部が大きく外反し小さな突起部や2個一対の貼り付け等簡単な装飾が添えられる平縁のもの（8～13）、大きな台形状の突起を有するもの（P-5覆-1、14、15）は前段階の伝統を引くもので、このような類が組み合わされるのであろう。アーチ状の把手を有するもある。縄文のみが施文された小型のものでは図右端に掲載した22、H-1覆-1、H-1覆-2等が伴うものとみられる。貼付帯による文様の3と8（土器集中4）、9・11（土器集中5）、12はK～L-15区周辺から出土している（図V-1）。このうち土器集中5の2個体は同時期と考えて良い。また1、10、13は「土器集中1・2」から出土している。

地文は斜行縄文（2は無節、13は結束のある斜行縄文）、結束第1種羽状縄文で口唇直下のごく狭い範囲、底部付近を除きほぼ全面に施文される。この段階、本遺跡では結束第2種羽状縄文のものや結節回転文（綾絞文）の付加されるものは認められない。2、4では文様帯は無文となっている。口唇部は作り出しが明瞭で、断面形は切り出し形や角形を呈し、この部分に縄の圧痕、ヘラ状施文具、棒状工具による刻みが整然とつけられる。貼付帯を用いた口唇部に明瞭に波状の文様を付けるものは包含層出土の4を除き見当たらない。口唇の一部と貼り付け上に施文されるもの（10）、突起部周辺と口唇部に斜めに施すもの（9）があるだけである。貼付帯で文様を描くものでは文様帯は2条で区画され、波頂部から垂下する文様があり、文様帯が胴部半ばよりも大きく下るものもある（H-1覆-3）。貼付帯には縦位に撲紐の押捺、ヘラ状工具での刻み目などのあるものと素文のもの（3、4）があり、後者がより新しい段階になるとみられる。また、包含層図V-23-38a・bに見られるような撲りの異なる三本一組の撲紐を貼付帯に並行に押捺するものが最も古い段階に位置付けられよう。

これら落部1遺跡の「古い段階」に相当する資料には八雲町野田生2遺跡フ拉斯コ・ピットP-3

サイベ沢VII式の古い段階

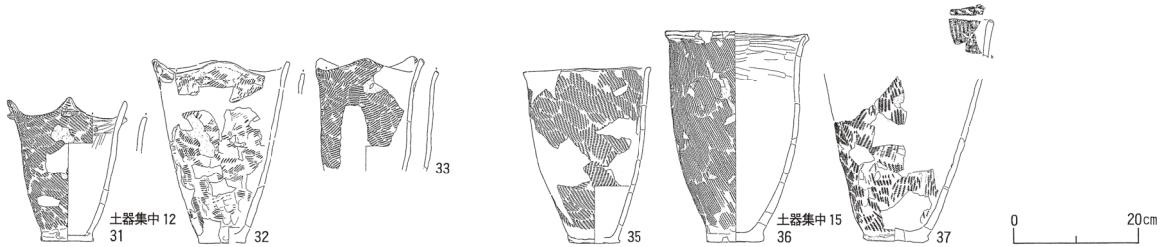


サイベ沢VII式の新しい段階



見晴町式

榎林式に関連するもの



図VII-3 落部1遺跡出土のⅢ群土器

覆土の一括資料がある（北埋調報167）。そしてサイベ沢VI式に対比される「森越II群第V段階」の土器群（峯山・大島ほか1975）と比較すると、器形、馬蹄形圧痕文の有無、貼付帯による文様の構成等の点で若干の相違が認められるもので、この点から本遺跡の資料はより新しい段階のものとして捉えることが可能である。

「サイベ沢VII式の新しい段階」には沈線により文様が描かれるものがある。前段階よりも小振りな台形状突起を有するもの（16）、棒状の突起、小さな方形、舌状の突起のあるものがこれに伴うとみられる。頸部のくびれは前段階ほど強くなく、底部からほぼ直線的に立ち上がる器形のものが多い。器高18~23cmの小型のものが多く認められるのもこの段階の特徴といえよう。口唇断面は丸みを帯びるもの、薄手で尖り気味のものが認められる。古い頃に多くある「口縁部が外反する平縁のもの」はこの段階では独自性を失い、全くかほとんど無くなるものとみられる。口唇断面が丸みを帯びあまりくびれのない類のもの（50）がこの段階に伴う可能性がある。

沈線文のものは貼付帯のもの同様、出土点数が非常に少ないので本遺跡の特徴である。文様は垂下する沈線と胴部をめぐる2、3条の沈線で区画された中に弧状、直線状の文様が描かれるものである。このなかで注目されるのは注口部がある土器（5）である。口唇の明瞭な作り出しや部分的に貼付帯により10に類する波状の文様が施文される点、また、ほかの土器には見られない刺突文の多用に注意する必要がある。出土状況をみるとこの土器の破片は「土器集中1・土器集中2」において1、10、13、27と混在している（図V-2）。

縄文のものでは突起部を肥厚させ頂部を凹ませる例が多く、突起周辺に貼付帯（19、20）や縄線（18）を施すもの、下位に粘土の貼り付けるものがある（19、21、24）。向かい合わせで異なる形状の突起部を持つものもある（17、20）。地文は単節斜行縄文、複節斜行縄文（5）、結束第1種・結束第2種羽状縄文、結節回転文（綾絡文）、魚骨回転文のもの（20）、自縄自巻的な縄文のもの（16）等多様であるが、結束第1種羽状縄文は少ないようである。口唇への施文は縄による圧痕が多く認められる。ヘラ状工具での刻みのあるもの、施文の無いもの（23）もある。34は体部の上下で縄文の施文方向を変えるもので、綾絡文も付加されている。最も新しく位置付けられるか後続する見晴町式に属する可能性がある。

これら「新しい段階」に対比される資料としてサイベ沢B遺跡第2号住居址（森田・高橋1967）の資料があげられよう。なお、注口部のある土器の類例は函館市石川1遺跡（H-3床面出土）にあり、「筒状の貼り付け」のある土器として報告されている（道埋文1988a）。

見晴町式に相当するものは少ない。3、4か所に山形突起部、波頂部を有するもので、底部は前段階ほどは張り出さず直線的に立ち上がる器形である。地文は主に斜行縄文が施され、口唇断面は角形で施文がある。突起下に粘土の貼り付け（31）、頂部に刺突や凹みを加えるものもある。32、33は後続するIII群b類（35~37）と混在し斜面下部の沢地形部分から出土する傾向が認められた（図V-1）。

以上、落部1遺跡出土のサイベ沢VII式土器を、貼付帯のあるものと沈線文のものとを中心に据えそれぞれに伴うと想定される土器群を集成しその特徴をまとめてみた。しかし、沈線文のもので注口部のある土器（5）に認められるような前段階の要素を強く残す資料の位置付けなど、さらに検討の余地を残すものもある。5の土器などは出土状況を加味するとあるいは貼付帯のある土器群に伴う可能性も考えられるのである。このような点を踏まえ、遺構の一括資料や周辺地域での土器のあり方との比較を通して、サイベ沢VII式の細分、つまりはサイベ沢VIIa式とVIIb式の土器組成の検討を進めていくことがこれから課題である。それにしても、当時の人々はどのようなきっかけから注ぎ口を付けるといった意匠を思いついたのだろうか。その用途、機能の問題とあわせ興味深い事項である。

（遠藤香澄）